

燈籠

太宰治

青空文庫

言えは言うほど、人は私を信じて呉れませんか。逢うひと、逢うひと、みんな私を警戒いたします。ただ、なつかしく、顔を見たくて訪ねていっても、なにしに来たというような目つきでもって迎えて呉れます。たまらない思いでございます。

もう、どこへも行きたくなくなりました。すぐちかくのお湯屋へ行くのにも、きつと日暮をえらんでまいります。誰にも顔を見られたくないのです。ま夏のじぶんには、それでも、夕闇ゆうやみの中に私のゆかたが白く浮んで、おそろしく目立つような気がして、死ぬるほど当惑いたしました。きのう、きよう、めつきり涼しくなって、そろそろセルの季節にはいりましたから、早速、黒地の単衣ひとえに着換えるつもりでございます。こんな身の上のままに秋も過ぎ、冬も過ぎ、春も過ぎ、またそろ夏がやって来て、ふたたび白地のゆかたを着て歩かなければならないとしたなら、それは、あんまりのことでございます。せめて来年の夏までには、この朝顔の模様のゆかたを臆おそすることなく着て歩ける身分になりたい、縁日の人ごみの中を薄化粧して歩いてみたい、そのときのよろこびを思うと、いまから、もう胸がときめきいたします。

盗みをいたしました。それにちがいはございませぬ。いいことをしたとは思いません。

けれども、——いいえ、はじめから申しあげます。私は、神様にむかつて申しあげるのだ、私は、人を頼らない、私の話を信じられる人は、信じるがいい。

私は、まずしい下駄屋げたやの、それも一人娘でございます。ゆうべ、お台所に坐すわつて、ねぎを切つていたら、うらの原つばで、ねえちゃん！と泣きかけて呼ぶ子供の声があわれに聞えて来ましたが、私は、ふっと手を休めて考えました。私にも、あんなに慕つて泣いて呼びかけて呉れる弟か妹があつたならば、こんな佻わびしい身の上にならなくてよかつたのかも知れない、と思われて、ねぎの匂においの沁しみる眼まなこに、熱い涙が湧わいて出て、手の甲で涙を拭ふいたら、いつそうねぎの匂においに刺され、あとからあとから涙が出て来て、どうしていいかわからなくなつてしまいました。

あの、わがまま娘が、とうとう男狂いをはじめた、と髪結さんのところから噂うわさが立ちはじめたのは、ことしの葉桜のところで、なでしこの花や、あやめの花が縁日の夜店に出はじめて、けれども、あのころは、ほんとうに楽しゆうございました。水野さんは、日が暮れると、私を迎えに来て呉れて、私は、日の暮れぬさきから、もう、ちゃんと着物を着かえて、お化粧もすませ、何度も何度も、家の門口を出たりはいたりいたします。近所の人たちは、そのような私の姿を見つけて、それ、下駄屋のさき子の男狂いがはじまつたなど、

そつと指さし囁き交して笑っていたのが、あとになつて私にも判つてまいりました。父も母も、うすうす感づいていたのでしようが、それでも、なんにも言えないのです。私は、ことし二十四になりますけれども、それでもお嫁に行かず、おむこさんも取れずにいるのは、うちの貧しいゆえもございますが、母は、この町内での顔ききの地主さんのおめかけだったのを、私の父と話合つてしまつて、地主さんの恩を忘れて父の家へ駈けこんで来て間もなく私を産み落し、私の目鼻立ちが、地主さんにも、また私の父にも似ていないとやらで、いよいよ世間を狭くし、一時はほとんど日陰者あつかいを受けていたらしく、そんな家庭の娘ゆえ、縁遠いのもあたりまえでございましょう。もつとも、こんな器量では、お金持の華族さんの家に生れてみても、やつぱり、縁遠いさだめなのかも知れませぬけれど。それでも、私は、私の父をうらんでいません。母をもうらんで居りませぬ。私は、父の實の子です。誰がなんと言おうと、私は、それを信じて居ります。父も母も、私を大事にして呉れます。私もずいぶん両親を、いたわります。父も母も、弱い人です。實の子の私にさえ、何かと遠慮をいたします。弱いおどおどした人を、みんなでやさしく、いたわらなければならぬと存じます。私は、両親のためには、どんな苦しい淋しいことにも堪え忍んでゆこうと思つていました。けれども、水野さんと知り合いになつてからは、や

つぱり、すこし親孝行を怠ってしまいました。

申すも恥かしいことでございます。水野さんは、私より五つも年下の商業学校の生徒なのです。けれども、おゆるし下さい。私には、ほかに仕様がなかったのです。水野さんは、ことしの春、私が左の眼をわずらって、ちかくの眼医者へ通って、その病院の待合室で、知り合いになったのでございます。私は、ひとめで人を好きになってしまふたちの女でございます。やはり私と同じように左の眼に白い眼帯がんたいをかけ、不快げに眉まゆをひそめて小さい辞書のペエジをあちこち繰ってしらべて居られる御様子ごようすは、たいへんお可哀かわいそうに見えました。私もまた、眼帯のために、うつうつ気が鬱うつして、待合室の窓からその椎しいの若葉を眺めてみても、椎の若葉がひどい陽炎かげろうに包まれてめらめら青く燃えあがっているように見え、外界のものがすべて、遠いお伽とぎ嘶ばなしの国の中に在るように思われ、水野さんのお顔が、あんなにこの世のものならず美しく貴く感じられたのも、きつと、あの、私の眼帯の魔法が手伝っていたと存じます。

水野さんは、みなし児なのです。誰も、しんみになつてあげる人がないのです。もとは、仲々の薬種問屋で、お母さんは水野さんが赤ん坊のころになくなられ、またお父さんも水野さんが十二のときにおなくなりになられて、それから、うちがいけなくなつて、兄さん

二人、姉さん一人、みんなちりぢりに遠い親戚しんせきに引きとられ、末子の水野さんは、お店の番頭さんに養われることになって、いまは、商業学校に通わせてもらっているもの、それでもずいぶん気づまりな、わびしい一日一日を送って居られるらしく、私と一緒に散歩などしているときだけが、たのしいのだ、とご自分でもしみじみそうおっしゃっていたことがございます。身のまわりに就いても、いろいろとご不自由のことがあるらしく、ことしの夏、お友達と海へ泳ぎに行く約束をしちやつたとおっしゃって、それでも、ちつとも楽しそうな様子が見えず、かえって打ちしおれて居られて、その夜、私は盗みをいたしました。男の海水着を一枚盗みました。

町内では、一ばん手広く商っている大丸の店へすつとはいって行って、女の簡単服をあこれこれらんでいるふりをして、うしろの黒い海水着をそつと手繰り寄せ、わきの下にぴつたりかかえこみ、静かに店を出たのですが、二三間あるいて、うしろから、もし、もし、と声をかけられ、わあつと、大声発したいほどの恐怖にかられて気違いのように走りました。どろぼう！ という太いわめき声を背後うしろに聞いて、がんと肩を打たれてよろめいて、ふつと振りむいたら、ぴしやんと頬ほおを殴なぐられました。

私は、交番に連れて行かれました。交番のまえには、黒山のように人がたかりました。

みんな町内の見知った顔の人たちばかりでした。私の髪はほどけて、ゆかたの裾すそからは膝ひ小僧せうじゆうさえ出ていました。あさましい姿だと思いました。

おまわりさんは、私を交番の奥の畳を敷いてある狭い部屋に坐らせ、いろいろ私に問いただしました。色が白く、細面の、金縁の眼鏡をかけた、二十七、八のいやらしいおまわりさんでございました。ひととおり私の名前や住所や年齢を尋ねて、それをいちいち手てぢよ帖うに書きとつてから、急ににやにや笑いだして、

——こんどで、何回めだね？

と言いました。私は、ぞつと寒気を覚えました。私には、答える言葉が思い浮かばなかつたのでございます。まごまごしていたら、牢屋ろうやへいれられる。重い罪名を負わされる。なんとかして巧く言いのがねなければ、と私は必死になつて弁解の言葉を搜したのでございますが、なんと言い張つたらよいのか、五里霧中をさまよう思いで、あんなに恐ろしかつたことはございません。叫ぶようにして、やつと言ひ出した言葉は、自分ながら、ぶざまな唐突なもので、けれども一こと言ひだしたら、まるで狐きつねにつかれたようにとめどもなく、おしやべりがはじまつて、なんだか狂つていたようにも思われます。

——私を牢へいれては、いけません。私は悪くないのです。私は二十四になります。二

十四年間、私は親孝行いたしました。父と母に、大事に大事に仕えて来ました。私は、何が悪いのです。私は、ひとさまから、うしろ指ひとつさされたことがございません。水野さんは、立派なかたです。いまに、きつと、お偉くなるおかたなのです。それは、私に、わかつて居ります。私は、あのおかたに恥をかかせたくなかったのです。お友達と海へ行く約束があつたのです。人並の仕度をさせて、海へやろうと思つたんだ、それがなぜ悪いことなのです。私は、ほかです。ほかなだけけれど、それでも、私は立派に水野さんを仕立てたててごらんに入れます。あのおかたは、上品な生れの人なのです。他の人とは、ちがうのです。私は、どうなつてもいいんだ、あの一とさえ、立派に世の中へ出られたら、それでもう、私はいいんだ、私には仕事があるのです。私を牢に入れては、いけません、私は二十四になるまで、何ひとつ悪いことをしなかつた。弱い両親を一生懸命いたわつて来たんじゃないか。いやです、いやです、私を牢へ入れては、いけません。私は牢へいられるわけではない。二十四年間、努めに努めて、そうしてたつた一晩、ふつと間違つて手を動かしたからつて、それだけのことで、二十四年間、いいえ、私の一生をめちゃめちゃにするのは、いけないことです。まちがっています。私には、不思議でなりません。一生のうち、たつたいちど、思わず右手が一尺うごいたからつて、それが手癖の悪い証拠になるのです。

ようか。あんまりです、あんまりです。たったいちど、ほんの二、三分の事件じゃないか。私は、まだ若いのです。これからの命です。私はいままでと同じようにつらい貧乏ぐらしを辛抱して生きて行くのです。それだけのことなんだ。私は、なんにも変っていやしくない。きのうのままの、さき子です。海水着ひとつで、大丸さんに、どんな迷惑がかかるのか。人をだまして千円二千円としばらくとつても、いいえ、一身代つぶしてやって、それで、みんなにほめられている人さえあるじゃありませんか。牢はいつたい誰のためにあるのです。お金のない人ばかり牢へいれられています。あの人たちは、きつと他人をだますことの出来ない弱い正直な性質なんだ。人をだましていい生活をするほど悪がしこくないから、だんだん追いつめられて、あんなばかげたことをして、二円、三円を強奪して、そうして五年も十年も牢へはいつていなければいけない、はははは、おかし、おかし、なんてこつた、ああ、ばかばかしいのねえ。

私は、きつと狂っていたのでしよう。それにちがいがございませぬ。おまわりさんは、蒼^{あお}い顔をして、じつと私を見つめていました。私は、ふつとそのおまわりさんを好きに思いました。泣きながら、それでも無理して微笑^{ほほえ}んで見せました。どうやら私は、精神病者のあつかいを受けたようでございます。おまわりさんは、はれものにさわるように、大事に

私を警察署へ連れて行って下さいました。その夜は、留置場にとめられ、朝になって、父が迎えに来て呉れて、私は、家へかえしてもらいました。父は家へ帰る途中、なぐられやしなかつたか、と一言そつと私にたずねたきりで、他にはなんにも言いませんでした。

その日の夕刊を見て、私は顔を、耳まで赤くしました。私のことが出ていたのでございます。万引にも三分の理、変質の左翼少女滔とうとう々と美辞麗句、という見出しでございまして。恥辱は、それだけでございませんでした。近所の人たちは、うろろう私の家のまわりを歩いて、私もはじめは、それがなんの意味かわかりませんでした、みんな私の様さまを覗のぞきに来ていなのだ、と気附いたときには、私はわなわな震えました。私のあの鳥渡ちよつとした動作が、どんなに大事件だったのか、だんだんはつきりわかって来て、あのとき、私のうちに毒薬があれば私は気楽に呑のんだこととございましょうし、ちかくに竹藪たけやぶでもあれば、私は平気で中へはいつていつて首を吊つつたこととございましょう。二、三日のあいだ、私の家では、店をしめました。

やがて私は、水野さんからもお手紙いただきました。

——僕は、この世の中で、さき子さんを一ばん信じている人間であります。ただ、さき子さんには、教育が足りない。さき子さんは、正直な女性なれども、環境に於おいて正しく

ないとありますがありません。僕はその個所を直してやろうと努力して来たのであるが、やはり絶対のものがありません。人間は、学問がなければいけません。先日、友人とともに海水浴に行き、海浜にて人間の向上心の必要について、ながいこと論じ合った。僕たちは、いまに偉くなるだろう。さき子さんも、以後は行いをつつしみ、犯した罪の万分の一にても償い、深く社会に陳謝するよう、社会の人、その罪を憎みてその人を憎まず。水野三郎。

（読後かならず焼却のこと。封筒もともに焼却して下さい。必ず）

これが、手紙の全文でございます。私は、水野さんが、もともと、お金持の育ちだったことを忘れていました。

針の筵むしろの一日一日がすぎて、もう、こんなに涼しくなつてまいりました。今夜は、父が、どうもこんな電燈が暗くては、気が滅入つていけない、と申して、六畳間の電球を、五十燭しよくのあかるい電球と取りかえました。そうして、親子三人、あかるい電燈の下で、夕食をいただきました。母は、ああ、まぶしい、まぶしいといつては、箸はし持つ手を額にかざして、たいへん浮き浮きはしやいで、私も、父にお酌をしてあげました。私たちのしあわせは、所詮しよせんこんな、お部屋の電球を変えることくらいのものなのだ、とこつそり自分に言い聞かせてみましたが、そんなにわびしい気も起らず、かえつてこのつつましい電燈をと

もした私たちの一家が、ずいぶん綺麗きれいな走馬燈のような気がして来て、ああ、覗のぞくなら覗
け、私たち親子は、美しいのだ、と庭に鳴く虫にまでも知らせてあげたい静かなよろこび
が、胸にこみあげて来たのでございます。

青空文庫情報

底本：「きりぎりす」新潮文庫、新潮社

1974（昭和49）年9月30日発行

1988（昭和63）年3月15日29刷改版

2001（平成13）年5月5日53刷

初出：「若草」

1937（昭和12）年10月号

入力：土屋隆

校正：鈴木厚司

2005年10月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

燈籠

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>